

## 中島広足 短冊

白茶色布目地に天地打曇

35.6×6cm

旅行日暮

けふもまた行へき道はのこりけり  
とほやま寺の入あひのかね 広足

中島広足(1792-1864)は江戸時代後期の長崎、熊本の国学・和歌をリードした歌人。

この歌は天保10年(1839)序刊の自撰家集『檀園集』には採られず、広足自身の筆で欄外に朱書されていること(弥富破摩雄旧蔵『檀園集』〈請求記号911.158-N568k〉本文67頁参照)、嘉永1年(1848)刊の自撰家集『しのすたれ』第1集には収録されることから、広足48歳から57歳ころの歌とみられる。

この時期の広足は、親友の本間素当、近藤光輔、青木永章が次々と死去、火災により家財を失ったほか、養子匡勝も死去するなど、種々の災難に見舞われ、著述活動も停滞している。新古今風の技巧をこらした派手な歌が多いとも評される広足だが、この歌は平淡な調べにしみじみとした哀情を漂わせており、当時の広足の境遇を思い合わせるとき一層感慨深く感じられる。

(『名家短冊帖』〈請求記号WA48-4〉から)

(上田由紀美)

